

「軍事学／地政学」を学ぶ意義

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパートも残り17回。担当最後のシリーズは「軍事学/地政学」。戦後のいわゆる「平和」教育によるその常識の欠如は、国際化、グローバル化の進展に伴い、我が国経営人共通の弱点となってきました。そのためここでは、まずそれを学ぶ意義の確認から始めます。

その1:「軍事学」を学ぶ意義

「平和を望むなら、戦争に備えよ」という古代ローマの格言。ところがその常識を持ち、それに沿って行動する現代人を、我が国では「戦争オタク」と呼んできました。しかしロシアによるウクライナ侵攻はそれを一気に変え、続編「はじめに」(Z-51-2022.1.31)の時点で予定していた、その学習の必要性についての詳細な説明を不要にしました。

「軍事学」は別名「戦争学」、また我が国の場合は「防衛学」。それが政治に必須なのは当然ながら、その常識の欠如は、私たちが関わる企業経営や生活にもさまざまな悪影響を及ぼしています。

それは文字通りの「戦略」「戦術」を筆頭に、同じく軍隊に起源をもつ「組織」「人事」においても顕著です。また身近な事例でいえば、「兵站」。新型コロナウイルスのワクチンを巡る一連の混乱は、その決定に関わる主要メンバーに、「ロジスティクス」の専門家が加わっていないことが主因です

その2:「地政学」を学ぶ意義

一方「地政学」とは、「地理学」を重視した「政治学」。それは19世紀、帝国主義の欧州で盛んになりましたが、その存在を世に知らしめたのは、ナチスドイツ。そのため、かつて枢軸国の一角を占めた我が国は、反動として、戦後はその表立った活動を控えてきました。しかしその間、商社や製造業など、商工業に伴う民間の泥臭い活動が、その領域における国としての弱点を補ってきたのです。

アメリカ51番目の州と揶揄される政治・外交・軍事に比べ、経済が一定の存在感を示してきたことからわかるとおり、「地政学」は企業戦略やマーケティングに必須の領域。またかく「外国」対象と思われがちですが、国内に関しても同様で、食・住・衣など、地域性を意識せざるをえない仕事に関わる場合、「特性」をつかむ「感性」と、それを「言語化」する資質、能力が欠かせません。

📖 底本 『敗戦真相記』 永野 護著
バジリコ株式会社(2002 再版)

📖 参照 『三々な経営』
E-8 「墜落」の要因①個人編
『続・三々な経営』
Z-20 私の推薦図書⑤日本

その3:「経営」への影響

さて以上のように、「軍事学/地政学」の常識の欠如は、企業経営にさまざまな悪影響を及ぼしています。しかし最大の問題は、企業幹部がその事実気づいていないこと。また気づいていても、それを一向に補正しようとしません。

ということで、我が担当最後のシリーズは、経営人に必須な「軍事学/地政学」の要諦を確認していきます。しかしその領域はあまりに広大、かつ深淵なため、我が国の現在に通じる部分に焦点を絞らざるをえません。そこで次回からは、永野護著『敗戦真相記』を柱とし、その総括や該当部分を取り上げて、次のコラムへバトンをつなぐことにします。

以下は、ジャーナリスト・田勢康弘氏によるその援護射撃、底本「あとがき」からの引用です。

永野は前書きでこう述べている。「我々は痛切にこの現実を自覚し真剣な反省と努力とによって、日本国民の文化水準の向上をはかり、軍備より解放せられたる文化大国を再建することによって、今日の敗戦の弔鐘を、明日の勝利の晩鐘と転化し得ることと信じます」

半世紀を経たいま、「勝利の晩鐘」どころか、日本は同じ過ちを繰り返している。敗因として永野があげたすべての項目が、いま、日本にあてはまるのだ。日本が没落の一途をたどった原因として。
(2002年の再版時からさらに20年)

2022年9月19日 実空